

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：3 4 5 3 5

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：2 2 7 9 2 2 9 6

研究課題名（和文） 長期に入院する統合失調症患者へのセラピューティックレクリエーションの開発と評価

研究課題名（英文） Development of Therapeutic Recreation program to schizophrenic inpatient at a long term

研究代表者

河野 あゆみ (KONO AYUMI)

神戸常盤大学・保健科学部看護学科・講師

研究者番号：2 0 4 0 1 9 6 1

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、長期に入院する統合失調症患者に対して、対人関係の向上に焦点化したセラピューティックレクリエーションプログラムを開発および実施し、それを患者の主観的経験に基づいて評価することであった。結果、対象となった患者は、男性7名、女性2名、合計9名であった。本プログラムは、長期に入院する統合失調症患者の対人関係に関する認識を向上させる可能性があることが示された。今後は、プログラムを洗練させ、調査結果を蓄積していく必要がある。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research was to develop therapeutic recreation program which raises interpersonal relations to the schizophrenic inpatient at a long term, and to evaluate it based on a patient's subjective experience. Participants were nine patients (seven men and two women). This program may raise the recognition about the interpersonal relations of the schizophrenic inpatient at a long term. It is necessary to refine a program and to continue investigation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計			

研究分野：

科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学

キーワード：精神看護学・レクリエーション・統合失調症

1. 研究開始当初の背景

今日の精神保健福祉対策は、「入院医療中心から地域生活中心へ」というスローガンに基づき、精神疾患患者の社会復帰促進を目指している。このスローガンを達成するには、入院が長期化した、統合失調症患者をいかに

社会復帰させるかが大きな課題の一つとなっている。

長期にわたって入院している統合失調症患者は、他者の感情や集団の雰囲気を読むなどの社会的機能が著しく障害されることによって、対人場面を避けて孤立し、対人行動

が破綻するほか、入院等の刺激の少ない環境の影響を受けて他者と接する意欲が減少しやすいという対人関係上の課題を抱えている。

このような患者が望むままに生活を送ることになれば、患者の対人関係能力はさらに低下し、ますます退院から遠ざかることになりかねない。そこで、長期に入院する統合失調症患者が地域社会に復帰するための準備として、一度失った対人関係能力、特に他者と接する意欲を改善しておかなければならないと考えた。

その方略として着目したのが、古くから精神科看護師が実践してきたレクリエーションである。精神科におけるレクリエーションは、対人関係に障害を抱える統合失調症患者が安心して他者と交流できる場を提供し、社会性の改善をもたらす効果があると考えられてきた。しかし、精神科で実践されてきた従来のレクリエーションは、“自由に楽しむ”ことに主眼を置いてきたため、その有用性についてのエビデンスがほとんど蓄積されていない。そこで、従来から行われているレクリエーションに治療的意図を加えて構造化したレクリエーションプログラムを開発ならびに評価することによって、プログラムの有用性を明確にできれば、長期に入院する統合失調症患者の社会復帰を促進する看護介入の一つとして臨床で活用できると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、長期に入院する統合失調症患者に対して、対人関係の向上に焦点化したセラピューティックレクリエーションプログラムを開発および実施し、それを患者の主観的経験に基づいて検討することにより、臨床的有用性を評価することであった。

3. 研究の方法

平成 22 年度は、対人関係の向上に焦点化したセラピューティックレクリエーションプログラム（以下、プログラム）の開発と介入準備を行った。平成 23 年度以降の 2 カ年は、開発したプログラムを実施し、患者の主観的な評価に基づいて臨床的な有用性の検討を実施した。

(1) 対象者

精神科病棟に入院中の統合失調症患者のうち、入院後 1 年以上が経過している者、他の積極的な心理社会的プログラムに参加していない者、言語的なコミュニケーションが可能な者、年齢は 20 歳以上の者とした。

(2) 介入方法

① プログラムの構造：プログラムの介入期間

は、一週間に 1 時間、合計 12 回（3 ヶ月間）とした。グループ形式は、クローズドグループで、グループの人数は 5-8 名とした。運営上の工夫点として、「患者に他者との交流を高めることを意識してもらうこと」「安全性の高いグループを作ること」「参加者同士の相互作用を高めること」を掲げた。参加者の抵抗感を軽減するために、プログラムの名称を「レクリエーションクラブ」とした。レクリエーションのメニューには、フルーツバスケットや自己紹介ゲーム、すごろく、外出計画の立案・実施・評価等の内容を盛り込んだ。

② プログラムの実施方法：開発した看護師用のマニュアルに基づき、研究者がリーダー、研究協力施設の病棟看護師がコ・リーダーとなって、プログラムを実施した。

(3) データ収集方法

① 人口統計学的データ収集：年齢・性別・婚姻状況・罹病期間・服薬内容について、プログラム実施前に記載した。服薬内容については、クローロプロマジン等価換算値を算出した。

② 半構成的面接：対人関係に関する対象者の認識を問う、半構成的面接を行った。調査は、プログラム実施前と、全プログラム終了後の一週間以内に個別インタビューを行い、対象者の許可を得て IC レコーダーに録音した。録音したデータに基づいて、逐語録を作成した。

(2) データ分析方法

逐語録から、対人関係に関する内容を抜粋し、比較分析することによって、カテゴリーを生成した。この生成したカテゴリーを使用して、プログラムに参加した長期に入院する統合失調症患者の対人関係に関する認識の変化を分析した。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

結果、本プログラムの参加者は 17 名、脱落者 7 名（うち、転棟による者 2 名、欠席が 7 回以上の者 5 名）、データ収集を拒否した者 1 名となり、分析対象者は 9 名となった。

対象となった 9 名の性別は、男性 7 名、女性 2 名であった。対象者の年齢は、41 歳～69 歳（平均 58.33 歳、SD 10.40）であり、発症年齢は 18 歳～40 歳（平均 25.89 歳、S

D6.68)であった。対象者の入院期間(月数)は、27ヶ月～419ヶ月(平均128.00ヶ月、SD119.19)であり、罹病期間(月数)は、200ヶ月～576ヶ月(平均389.67ヶ月、SD125.43)であった。各対象者の服薬内容の、介入前クロールプロマジン換算値の範囲は450～1300であり、介入後の範囲も同様であった。

(2) 分析結果

インタビューの逐語録から、対象者の対人関係に関する認識に該当するデータを抜粋し、そこからコードを抽出した。次に、類似するコードを集め、カテゴリーを抽出した。なお、文中の<>はコード名を、[]はカテゴリー名を表すこととする。

① 介入前の認識

介入前の患者の対人関係に関する認識は、以前の対人関係に関する経験から<つかかかれたことが怖かった>等、他者から[攻撃されるのが怖い]という認識を持ち、<文句を言って喧嘩になるのが嫌だ>と思いき<他の人とぶつからない場所にいる>など、[喧嘩にならないよう他者と距離をおく]ことを意識したり、<人づきあいを楽しいと思ったことがない><つきあいづらい>と[人づきあいは楽しくない]と感ずることや、<喧嘩になるから話しても無駄>と思いき<人の話を聞かないことが何度もあった>と[人づきあいは無駄]という認識が存在していた。そのような認識に加え、<他者が接してくれるのを待つ>など[受け身でつきあう]ことや、<攻撃されないために、エゴイズムに陥らないように気をつける>など[喧嘩を避けて慎重に行動する]ことをしたり、<嫌われないように場を壊さないように注意する>など[場に適した行動を意識する]ことをしていた。またこの一方で、[人づきあいは大事]だと考え、[人づきあいは時に楽しい]という認識もあったが、<人づきあいを楽しもうと思うが、よくわからない>と[迷いながらつきあう]という認識も存在していた。そして、実際に他者と接する際には、<褒める時は、よく褒めるようにしている>など[工夫しながらつきあう]ことも意識していた。

② 介入後の認識

介入後、これらの対人関係に関する認識は、次のような変化を見せた。患者は、レクリエーションクラブに参加することで、そこで説明された人づきあいを良くするポイントについて、<昔習ったことと人づきあいを良くするポイントが繋がった>と

感じ、[人とのつきあい方がわかりやすくなる]という感覚を得ていた。実際に他者と接する際には、<人づきあいを良くするポイントを生かして人を誘ってみた>り、以前と同様に[工夫しながらつきあう]ことを意識し、<クラブが続いて今後の可能性が出てくれば嬉しい>と[前途洋々になる]感覚を得たり、<余裕をもって話し合うことができた>と[人づきあいが上手くなった]と実感し、[人づきあいは大事]だと考えていた。また今後の対人関係についても、[人づきあいをよくするための新たな目標を探す]ことをしたり、[もっと上手に人づきあいていこう]、[人と輪になろう]、[人を敬愛していこう]、[人を誘って互いに楽しもう]という目標をもつようになっていた。

(3) 今後の展望

本研究で開発したセラピューティックレクリエーションプログラムは、長期に入院する統合失調症患者の対人関係の向上に役立つ可能性が高いことが示された。今後は、プログラムを洗練させ、長期に入院する統合失調症患者の対人関係に関する認識と行動の改善に効果をもたらすかどうかについて、調査を継続していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

松田光信、河野あゆみ、當目雅代、西田みゆき、川崎絵里香：プログラム開発・評価研究のゴールはどこにあるのか、日本看護研究学会36、(頁未定)、2013.

[学会発表] (計1件)

松田光信、河野あゆみ、當目雅代、西田みゆき、川崎絵里香：プログラム開発・評価研究のゴールはどこにあるのか、日本看護研究学会第38回学術集会(交流集会)、2012年7月、沖繩.

[図書] (計2件)

- 1 山本勝則、藤井勝則編著、メヂカルフレンド社、根拠がわかる精神看護技術、河野あゆみ 第VI章薬物療法と精神科リハビリテーションの援助技術 レクリエーション療法・芸術療法、2012年 336～344.
- 2 山本勝則、藤井勝則、守村洋編著、メヂ

カルフレンド社, 根拠がわかる精神看護技術第2版(出版決定), /河野あゆみ 第IV章症状マネジメント 9 無為・自閉 第V章薬物療法と精神科リハビリテーションの援助技術 レクリエーション療法・芸術療法、2013年.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河野あゆみ (KONO AYUMI)

神戸常盤大学・保健科学部看護学科・講師

研究者番号：2 0 4 0 1 9 6 1

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし